

令和7年度

こども民俗芸能大会

出演団体・演目のご紹介

ごだい しし まい 五代獅子舞



ごだい しし まい ほぞんかい 弘前市●五代獅子舞保存会

延徳3年(1491年)、津軽氏の先祖光信公が西津軽郡鯉ヶ沢種里に赤石城を築いた頃、京都から来た人が、春日大明神の神鹿をかたどった獅子頭を作り、人々に舞を教えたところ、光信公も気に入り、厄払いや悪霊を追い払うための舞として奉納したことに始まるといわれています。その後、光信公は現在の弘前市(旧岩木町)で大浦城を築き、獅子舞もお供してきたといわれています。保存会は昭和34年に設立されました。

舞では、先達の道化役のオカシコが獅子を誘導します。月夜の山奥で二頭の雄獅子が雌獅子を独占しようと闘う、情炎に狂う姿を描いたといわれ、古典的な洪きと独自の枝風をもって演じられます。

こ がわら かぐら さん ば そう 小川原神楽(三番叟)



こ がわら かぐら さん ば そう 東北町●小川原神楽連中保存会

今回演舞する「三番叟」は、五穀豊穡を祈願する舞で、足拍子を踏み、鈴を鳴らして活発に舞うのが特徴で、足拍子は地固めや種まきの所作、鈴の音は場を清め祝福を表します。

今回は、この「三番叟」を3歳から中学1年生までの子どもたちが一生懸命練習してきました。日々の練習の中で、舞以外に太鼓や手拍子などを覚えて指導者顔負けの拍子を奏で、大人達を驚かす子もいます。

今回は、初めての地元以外での演舞で大変緊張していますが、練習の成果を発揮し最高の演舞をしたいと思っています。

ほん そん けい まい 本村鶏舞



ほん そん けい まい おいらせ町●本村郷土芸能保存会

本村鶏舞は、江戸時代に起源を有する先祖供養の舞で、笛や太鼓の拍子に合わせて、鶏をかたどった烏帽子をかぶった舞手が扇子や太刀を使って跳ねるように踊る所作が特徴です。

この舞は、江戸後期に五戸町切谷内からおいらせ町本村地区に伝習され、町内の小学生を中心とする地域の子どもたちによって脈々と継承されてきました。

今回は、全13演目の中から、①庭入り(にわいり)②一本扇子(いっぽんせんす)③七拍子(しちひょうし)④庭引き(にわひき)を披露します。

子どもたちの元気に飛び跳ねるような舞をぜひお楽しみください。

のう まい や しま 能舞(屋島)



のう まい や しま 東通村●白糠子ども会

下北の能舞は中世芸能の姿をよく残している修験能の典型といわれており、国の重要無形民俗文化財に指定されています。東通村には目名に定住した修験者の目名不動院により、15世紀に伝えられたとされています。

能舞演目には、権現舞・儀礼舞・武士舞・祈禱舞・道化舞があり、本公演では武士舞に分類される「屋島」を披露します。

「屋島」は、源平合戦を題材とした演目で、屋島の戦いと壇ノ浦の戦いという二段構成となっています。舞手2人の息の合った舞は、源義経の家臣佐藤兼信と平家随一の猛将平教経の戦振りと武士の生き様を表現しています。

はち のへ 八戸のえんぶり



はち のへ 八戸市●白鷺小こどもえんぶり

えんぶりは、豊年祈願のお祭りとして800年以上前から受け継がれてきたといわれており、その中でも八戸えんぶりは国の重要無形民俗文化財に指定されています。

白鷺小こどもえんぶりは、小学校2年生から6年生の18名の子どもたちが活動しており、毎年2月17日から4日間開催される「えんぶりの日」に向けて日々練習に励んでいます。

男の子たちによる大夫(たゆう)は、馬の頭をかたどった烏帽子をかぶり、勇ましく、農作業の流れを表現しています。その他、大漁を祈る「えびす舞」、女の子たちによる「大黒舞」「えんこえんこ」など愛らしい祝福芸もどうぞご覧ください。

さめ かぐら ばん がく とり まい 鮫神楽(番楽・鳥舞)



さめ かぐら ばん がく とり まい 八戸市●鮫神楽保存会

山伏神楽の鮫神楽は、修験者の手から離れ、愛好者が中心となり伝えてきたもので、他に歌舞伎物と呼ばれる組舞(くみまい)13演目を考案し、200年以上綿々と続いてきました。八戸藩日記にも載っています。嘉永年間(1819-1828)に編まれた33演目の台本も残っています。また神仏混交の名残である「墓獅子」も民俗学的に貴重なものです。昭和46年から、小中高生を対象にした伝承会を実施し、練習の成果を毎年発表会で披露しています。

今回の演目「番楽」は、鮫では、場を清める意味で最初に舞われています。「鳥舞」は、鳥兜をかぶり、足や手の運び、扇の使い方など、複雑な動作が入っています。どちらも人々をことほぐ舞です。

くり やま だ い かぐら おど じ し 栗山太神楽(踊り獅子)



特別出演(大人)

くり やま だ い かぐら おど じ し むつ市●栗山太神楽保存会

栗山太神楽の起源は不明ですが、宝永4年(1707年)に栗山の神楽集団が紀州熊野本宮の十二所(じゅうにしょ)に神楽を奉納した記録があり、18世紀以前から活動していたと考えられます。また19世紀初めには、盛岡藩の芸能集団であった七軒丁(しちけんちやう)から江戸で習った各種演目を伝授され、かつては下北半島各地約20ヶ所に芸を伝承しています。

現在伝えられている演目は、二人立ちの獅子舞で「通り獅子」または「平獅子(ひらじし)」といわれる演目と、サササ振りが加わる「踊り獅子」または「七軒丁」といわれる演目の二つです。下北の総鎮守の田名部神社例大祭では、御神輿行列の先払い、神事での祈禱舞の奉納や玉串奉奠時の拍子を担っています。

会場ご案内図

